
とある科学の能力複写《アビリティコピー》

ガソリンスタンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の能力複写
アビリティコピー

【Nコード】

N7863Y

【作者名】

ガソリンスタンド

【あらすじ】

永来海翔という置き去り（チャイルドエラー）の少年は、ある日、麦野沈利というlevel5に助けてもらい、義弟として育てられた。

平和な日常を過ごし、ジャッジメント風紀委員を夢見た海翔——願いは叶ったものの、ある事件から彼は自分の無力に失望してしまう。心の迷いの中、海翔の前に立ちふさがるものとは――

失望のprolog(前書き)

記念すべき第一話

失望の prolog

夜中2時30分

とある研究所の窓がない部屋で、白い学校指定の夏服を着ている少年一人が蛍光灯の放つ青白い明かりの中で倒れていた。

その少年を中心に鉄の臭いが充満し、白の夏服は腹から出てくる赤黒い液体で染められていく。

それを見ていた彼は“ガシャン”と、パイプイスを蹴り飛ばして、走って倒れている少年に近づく。

少年に近づくとも両膝を床につけ片手で頭を持ち上げ、ダラリと力ないように地面にうなだれている手をもう一つの手で持ち上げる。

その二人には風紀委員の腕章ジャッジメントがあった。

その頭を揺さぶって、少年の顔を見ながら彼は叫ぶ。

「おい死ぬな。今救急車を呼んだ。もう少しでくるよ!!」

その声を聞きながら、“血だらけの少年”は目を開ける。

黒くぼやける視界に入ってきたのは、涙を流しながら助けを求めるように叫ぶ少年。

彼の白い夏服と頬には、少年の返り血が付着している。

その彼の涙が頬に付いた血を吹きながら、自分の頬落ちてくるのが分かった。

この光景を見て彼は悟った。死ぬと言われたのに、最終手段として救急車を呼んだもらったのに。友人の前なのに――

——俺は、死ぬのか——

そう悟ってしまった。

「そんなこと言っな!!」

まるで諦めた人間の手を無理矢理引つ張るように彼は少年に叫ぶ。諦めている少年はそれに応える。しかしそれも虫の息といったところ。

「俺は…無理…だ、後は、…頼んだぞ」

もはや遺言といったところか。それでも彼は遺言を認めず、微かな光の希望を探すように悲しみに震えながら叫ぶ。

「ふざける、な…お前には、…初春飾利っていう…妹がいる、だ、ろ」

妹がいるからと。兄が死んでしまったら、彼女が悲しむと。彼は少年の存在価値を今一度、分かせ生きる希望を持たせる。

ただ少年はそれを持たせたところで、助かる状態ではなかった。氣息奄々とする少年は大量の血が溢れ出し、体は筋肉がないように下に垂れ下がっている。救急車に乗れたとしても、とても助かるものではなかった。それほどひどい有り様だった。大量の血が流れているというのに現に今もなお流れ続けており、赤黒い液体は勢いが留まることなく青白い部屋を染めていく。遠くから見たら死体同

然。

「^{なき}風……頼むから、目を覚まして、くれ」

彼は何もできない自分の齒がゆさに腹をたて、ただ叫ぶ。彼の叫び声は、部屋から廊下まで悲しみと同時に響いた。

∞

夜中2時32分

外は豪雨が周りは暗く、寮などのビルは寝静まっていた。

暗い夜に僅かに人工の光に照らされながら、女が一人。

豪雨なので傘をさしても壊れると思ったのか、濡れても構わず、アスファルトの道路を歩いて行く。そのまま、直線上に進んで行くと20階建てのビルが見えてきた。

ふと、ビルの自動ドアの入口で立ち止まり、ビルを見上げる。

“ピカッ”と一瞬だけ周りが光った。あとから大きな音をたて雷が落ちてきた。

光の所為で、反射的に目をつむりもう一度目を開ける。

暗くてよく見えなかったが光った時一瞬だけ、窓から黒い煙が出て空に向かっていくのが見えた。高さからすると恐らく19階。爆

発か何かあったのだろう。

ビルの建ち並ぶ場所なのであまりにもその煙は異常だった。いや、ビルが異常だった。きっと中が一番ひどい有り様になってるかもしれない。

「……………」

思い悩んでも仕方ないので、は自動ドアに近づく。

「……………あれ？……………てそういえば夜だったわね」

夜のためかもちろん閉まっており、ピクリと反応を示さない。
こんな時間に自動ドアが機能するのはコンビニぐらいかと思い、
は自動ドアから、距離を置く。

そして雨で濡れた手で、指で自動ドアを指す。

「1・2・3ドン！！」

女の滅茶苦茶なカウントダウンの終わりと同時に、指先から“ゴウツ”と空気を斬るような音を出しながら、青白いレーザーが勢いよく発射された。

その勢いは収まることなく、ガラス製のドアを破壊。距離を置いたのも、散ったガラスの破片が突き刺さらない為だ。

ドアを破壊したところで懐中電灯をつけビルの中に入る。
手前の受付カウンターを通り過ぎ、奥のフロア地図を懐中電灯の光で調べた。しかしその前にあることに気付く。

（…おかしいわね。あんだけ派手にドアを壊しておいて、敵が来ないなんて…）

不自然だった。外も中も全部が。真夜中にビルに煙が巻き上がった原因がただの事故と言えるのか。しかし事故ならもつと派手に壊れているのではないか？

ただ事件と呼ぶにも不自然だった。人の気配はしないし、それに何故場所を限定してビルを爆発させたのか。

「場所を選んで爆破させたのは、ただの爆弾魔ではないか」

（…とにかく、急がないといけないわね）

女は自分に言い聞かせ、矛盾点を取り除くためにも、手前の階段を登ることにした。

二段飛ばしで歩を歩めると青白い光が見え、やっと暗闇に紛れた女の姿を暴いた。

女は秋物らしい明るい色の半袖コートを着込んでおり、ストッキングで覆われている。茶色い髪は、肩と腰の中間部分まで伸びている。

名は麦野沈利。

彼女は『アイテム』の一人。

学園都市の非公式組織で、主な業務は統括理事会を含む『上層部』暴走の阻止。科学サイドを左右させる面子の一人だ。

しかし今回は『アイテム』としてこのビルに乗り込んだ訳ではない。

たった一人の義理の弟——『永来海翔』（えいらいかいと）を助けるためにここまで来たのだ。

血は繋がっていないくとも、麦野にとって永来は大切な義弟。私情だがそこに理屈などなかった。

「……!!」

麦野は突然目を見開いた。

救急車と消防車、警察官のサイレンが外で鳴り響いていたからだ。
アノチスキル
ゾツと、背中から悪寒を感じた。もしあの救急車に乗るのが自分の義弟だったら。それよか、手遅れな状態だったら。

「…そうならないように急がないとね…」

もう一度自分に言い聞かせ、階段を登ることにした。

∞

まるで映画のワンシーンだ。

その部屋では血まみれの少年——『初春凧』とそれを抱えてただ泣き叫ぶ無力の少年——『永来海翔』。凧は目を瞑ったまま、

「飾利には、うま、…く、説明、し…といてくれ」

氣息奄々とした凧は途切れ途切れ、海翔に伝える。

それこそ映画のワンシーンの一言だ。

しかしそれはまごうことなき現実だった。カメラマンも居なければ、キャスト、スタッフも居ない。本当に映画のワンシーンに見えるが、その光景は非現実ではなく、紛れもなく現実だった。
フィクション

「おい？…おい！！」

突然、風の息が止まった。そして掴んでいた風の手が、そつと優しく抜かれ地面に落ちた。それらを告げたのは――

――死――

それに気付いた海翔は、天井に向かって泣き叫んだ。自分は無力だと。目の前の人一人救うことがないクズだと。何が人を救う風紀委員だと。

泣き叫ぶ海翔の頭に、手のひらが置かれた。

麦野沈利だ。

その手は、優しく海翔の頭を撫でた。それだけが唯一の慰めだった。ただそれでも現実是不変ならない。

海翔は手のひらをグーにして地面を強く叩いた。当たりよつた自分の苛立ちだったことに海翔は気付いた。そしてもう一度、

「チクシヨーーーー！！！！」

泣き叫んだ。

この日少年は――

—— 失望した ——

静寂の墓場（前書き）

誤字脱字がありましたら、指摘してください。

静寂の墓場

7月19日PM7時10分
第10学区

「うわー！ー！！ゆ、許してくれ」

太陽の光が当たらない路地裏で助けを求める声が聞こえた。

その路地裏では、不良が三人。そのうちの一人が怯えている人の襟元を掴んで、壁に押し付けている。

声に驚いたのか、ポリバケツの上に乗って日向ぼっこをしていた猫が不良の横を通って逃げ出した。

「おい？金出せよ」

あまりにも物騒だ。たとえ目立たない路地裏だったとしてもここは仮にも第10学区。

学園都市の唯一の墓が存在する場所。それを知ってこんなことをするのはどこの愚か者だ。

死んだあとぐらいにはゆっくり眠らせてあげたいものだ。そう思いながら二人は、路地裏に入った。

一人は高校生ぐらいの顔立ちをしている男。髪は黒でほんの少し耳に掛かるぐらいで、ボサボサの髪型だ。瞳は黒で、他の色も混じってない瞳。その少年の名は永来海翔。

「居るよ。黒子」

「誰彼かまわず、人を下の名前で呼ぶなんて相変わらずデリカシ
ーの無い殿方ですこと」

そのデリカシーの無さに手で髪をたなびかせているのは、白井黒
子という少女だ。

中学生のぐらいの子で、茶色いツインテールをしており腕には風
紀委員の腕章がある。
ヤッジメント

「それは向こうだろ？墓場と知っておいて、恐喝だぞ。妙な墓荒
らしもいとこだ」

海翔はあきれ気味に額に手を当てた。それに納得したかのように、
白井も頷く。

「確かに最悪ですわね。死者に恨み殺されるなんて、言っても信じ
ないはずですよ」

それこそ物騒だな、と言いながら海翔は不良が居る奥へと進んだ。

ここは学園都市だ。死者とか神とか、オカルトなんて存在しない
と思うのが普通だろう。故に黒子は海翔も全否定するだろうと思っ
て言ってみた。しかし海翔は違った。神とか魔術はともかく、死者
は存在しないとは思ってないらしい。

だが海翔が死者はいるかもしれないと思ったのは、見たから知りた
いから信じてるからとか、そんな曖昧でただの興味本意ではない。
そう、触れられたくない過去がある。

(……う、そうでしたわね。この人は……)

海翔の過去を知っている白井はしまったと思いながら、白井は海翔の後ろを進んでいると、不良達はようやく海翔と白井の存在に気付いた。

「あん？お前達何者だ」

「助けてくれ！！頼む！！？」

白井は不良に屈することなく捕まってる男に頷き、海翔の前に出て右腕は前にやるとそこに付いている風紀委員の腕章を左手で引き上げて、右足を踏み込み、戦隊ヒーローみたいなポーズをして見せた。

「風紀委員ですの。恐喝の疑い及び暴行の疑いで、拘束しますの。大人しくしてくださいな」

そのステレオタイプのお嬢様口調はどうにかならないかと思いつながら、海翔も踏み込む。

海翔も黒子の見方をしているが実は彼、風紀委員ではない。いや、風紀委員だったと言っべきか。

「ん？てめえ、永来海翔か？」

「……っ、なんで赤の他人が知っているんだよ」

するとまるで不良は海翔を嘲笑うかのように言った。

「警備員はお前のためにあの事件のことを隠したつもりらしいが、俺達の間ではただ漏れなんだよ。その証拠に、」

おら！、と言うと不良の掌てのひらから、バリバリ、と音を立て青白い閃光ほしはじが迸はなった。

電撃使い（エレクトロマスター）の能力だ。みる限りlevelは3といったところか。

「何言つてんだ？ level3ぐらいじゃ、書庫バンクのハッキングは不可能だぞ」

海翔は電撃使いの能力で書庫バンクにハッキングをしたと踏んだのだらう。

しかしここは学園都市だ。能力での犯罪など想定済み。対能力者用手錠、シャッターなども作られており能力でのハッキングの警戒も備えているはずだ。白井の先輩——電撃使いのlevel5の御坂美琴にもハッキング困難なデータは山ほど存在するのにlevel3が学園都市としてハッキングなど…ましてや書庫バンクのデータだ。そうやすやすとlevel3ができるはずがない。

「はん、勘違いしてんな。当たり前だ、俺一人でできるわけないだろ」

それは偉そうに言えることか、言えまいか。

もう一人の不良が片手に持っている金属バットをこちらに向けて言ってきた。

「俺様能力は、情報解析（ ）だ。情報を読み取り、それらを元に構築していくことでハッキングも可能となる能力」

バラバラになった力ギ（情報）を組み合わせ、ドア（書庫）に入る（ハッキング）するようなものだろう。彼らが協力してハッキ

ングしたのかもしれない。

不良の興味本位で行った、書庫にハッキング、というくだらないことだけで、自分の過去がバレたのかと海翔は腹を立てた。

大方不良達の笑い話にしていたんだろうと思い、それでも怒りを抑えながら、不良に忠告する。

「第二忠告だよ。恐喝、暴行、ハッキングそして」

と、一呼吸して

「風が眠る場所を汚す奴は許さない！！だから、拘束する」

海翔が死者はいるかもしれないという理由が言葉となつて、それには、明らかな自分への罪悪感と信念らしいものがあつた。

だがそれらをへし折るように、不良は第二忠告を聞いても、右から左へと抜かす。

「はア。風紀委員を辞めた奴が今更、風紀委員気取りですかあ？」

確かに気取っているだけかもしれない。逃げてるだけかもしれない。向き合えないだけかもしれない。

それでも海翔の怒りは頂点に達し、聞こえてきた不良達の笑い声が、宣戦布告となつてしまった。

「黒子…僕はもう…我慢できない」

海翔はクルミも割れそうなほどに、歯を食いしばっていた。切れ気味体質なのかは知らないが、それでも白井は応じる。それは、半場あきれ気味に。そして、白井が言葉にのせた感情は、不良

に向けられたものなのか海翔に向けられものなのか、はたまた別の誰かか。

「はあ……本来は、私^{わたくし}が出る幕だったのですけれど、致し方ありませんわね。気絶する程度でしたら構いませんわよ」

海翔は白井に頷き――

「さてええと。黒子の許可が出たんだ。死者を起こさない程度に暴れてやる」

そう言つと、突然不良達の前から白井が消えた。

そして現れた先は、被害者の襟首を掴んでいる不良の隣。

「……………!!」

身長のこともあつてか、白井は頭より手を高く上げて、襟首を掴んでいる不良の腕を掴む。それに驚いた不良は被害者の男の襟首を離し、尻餅させた。

「これが最後の忠告ですの。頭から地面にダイブしなくなったら大人しく言うことを聞いてくださいな」

不良は目で二人の仲間に助けを求めたが、向こうも向こうで何かあつたらしい。

「ひい、あいつ^{デュアルスキル}多重能力か!？」

不良の目に入ってきたのは、海翔の有り得ない能力だ。

海翔は電撃、風、炎、水、空間移動などを巧みに使い、二人の不良を追い詰めている。

驚くのは当たり前だ。

能力は一人一つまでと言う常識を破っているのだから。

学園都市は神や魔術ほどではないが、また多重能力というのも非現実的なものだった。

今思えば、自分の目の前でオカルト現象が起きたらどうするのか。自分は非現実を現実として受け止めれるのか。

もしかしたら、それが恐怖となるかもしれない。

だから今思った。

神や魔術、オカルトというものは実際は存在していて、だがその『オカルトを知ってしまった』という拒絶から恐怖が出てきて、その恐怖を現実として受け止めれず、人間の思考が故に次第に非現実的として受け止めてしまった産物なのではないかと。

だから、不良は彼（海翔）の存在を恐怖した。

「何誤解しているんですの。貴方はあの方の書庫へをしらべたんですのよね」

「あ、あいつの能力はこういうものだったのかよ」

「彼は、level 13の能力複写。アビリティコピー能力者の能力をコピーして、使用しているだけですの。まあ、能力の演算は複雑らしいのですけれど」

能力を読み取り、それを操りし能力。

その能力はもつとも遠い存在で、もつとも多重（非現実）に近し能力。それこそが――

「ひえっ……」

不良は自分とその能力の力の差に怖じ気づいたのか、尻餅をついた。いきなりのことに、びっくりしたのか力も抜けている。

白井はその隙を逃すはずがなく、不良に手錠を掛けた。

能力複写（非現実）の恐怖の圧迫感に殺されるより、捕まった方がましかもしれない。

そうも考えていないのに、安堵が不良を包む。

「終わったか、黒子？」

不良を倒したのか、海翔が黒子の所にやってきた。

「ええ、何とか」

∞

不良達を捕まえたあと、墓場にようやく静けさが舞い戻った。

近くには、黒子が呼んだ、警備員の対能力者用トラックがきており、少し物騒なもの、さっきの戦いがあるよりは何倍もマシだろう。

それを見た海翔は思った。

これは自分が逃げているだけではないかと。

今回、海翔が風の墓場を守るため戦った。それが今の結果だ。何も問題はなかった。

ただ海翔はそういう物事を見ることで、安堵を得ているだけで、それはただの逃げでしかないのかと。

（風という存在に…僕は背中を見せて、逃げてるだけか）

“プルルル”と、着信音を一度も変えてない携帯が鳴りだした。心の迷いの気晴らしにもならないだろうと思いつつ、携帯を手取る。

『ハイハイ元気にゃー、海翔君』

「何だ。姉さんか」

『何だかやつれているわね』

海翔の義姉。麦野沈利だ。

海翔の言った『何だ』に反応し、すぐに竄れていると分かったのだろう。

そのあたりはさすが姉さんだと思う。

海翔と麦野は3年前、麦野が仕事の帰りの途中偶然、置き去り（チャイルドエラー）を見つけ、それが永来海翔という名の少年だった。

麦野は嫌々ながらも、海翔を育ててくれた。
多少理解できない部分もある義姉だが、それでも海翔にとっては大切な存在だ。

そう思うと小さな笑みがこぼれた。

「で？姉さん何の用」

『あんた？重大な物を忘れているのに、まだ気付いてないの』

「へ？」

思わず間抜けな声を漏らす海翔。

何か忘れていたのかと？考え自分の姿を見る。

高校指定の制服。

うん、間違っていない。

ただことであることに気付く。

手ぶらの両腕。

手ぶらの両腕。

彼は今学校へ行く途中（凧の墓参りも含めて）。

学校に持って行く物は何か？

『登校バック』……今は、手ぶら……………

「あ、ああああああ!？」

何て叫んでももう遅い。海翔は家にバックを置き忘れている。

『というより、何故麦野家に永来のバックが超置いてあるんですか？二人は義兄弟と言っても、住んでる場所は別々何ですよね？』

海翔の知らない声が、聞こえた。もしかしたら、アイテムだろうか？

海翔は、麦野からアイテムのメンバーの名前を聞いたことあるが、直接出会ったことは無いのだ。

麦野が言う限り、『海翔だとしてもアイテムの仕事については教えられない』だとか。

『家にちよくちよく遊びに来るのよ。そのたび何か忘れるんだけど』

『結局、麦野は義弟に好かれてるって訳よ』

また誰かの声が聞こえてきた。

わざわざ口調に『超』とか『結局』とか『訳』入れるあたり、多分一癖二癖ある変人の集まりではなからうか、アイテムというのは。しかし、海翔はそれを言うのは止めて置いた。

うん、女性とは怖いものだ。特に義姉だからといっても麦野あたりは何かしでかすかもしれない。勿論、麦野だけとは限らない。

『フレンド。第10学区にこの学生バック持ってって』

『ちょっと、なんで私って訳よ!!』

『昨日仕事失敗した罰』

『超良かったですねフレンド。報酬没収よりかは超チヨロい罰ですよ』

『大丈夫。私はそんなフレンドを応援してる』

どうやら、フレンドという変人がバックを取りに来てくれるらしい。

変人を相手するのは大変だ、なんて言えるはずがなく、結局海翔の意見は聞かれぬまま電話を勝手に切られ、決定した。

「墓参りして待つとか」

学校が始まるまで、時間がある。

海翔はここにきた目的（初春風の墓参り）を果たすために、フレンド（変人）を待ちながら、墓場の方へと向かった。

静寂の墓場（後書き）

こんな駄目文を読んで下さってありがとうございます。
私は高校生ですが、頭悪い（汗）です。
アドバイス、感想お待ちしております。

謎の殺意（前書き）

すみません。間違えて出来上がり前のを投稿しちゃったので、
去して訂正しました。迷惑かけてすみません m（―――） m

謎の殺意

海翔は麦野との通話でフレンドが来ると分かった後、墓参りに来ていた。

縦一列、横一列に間をバランスよく置かれた墓には、家族や知り合いのお供え物があり、花などが添えられていた。

そして、動く花畑が一つ。

それは花畑をモチーフにしたカチューシャを頭に乗せており、黒のショートカットで、中学生の顔立ちをしている。

その少女は一つの墓の前で懸命に祈りを捧げている。

さつき洗ったのであろう。その墓は、綺麗に汚れが落とされており、太陽の光を反射させて、海翔の方へと向けていた。

海翔にとって、それは嬉しかった。まるで、風が傍にいないような温もりで、笑っているようだった。

懸命に祈りを捧げているこの少女——初春飾利もそうだった。風という大切な兄の存在を亡くしたという現実は、13歳の少女にとってあまりにも酷だ。

だとしたら、この風の側にある太陽の光が彼女の慰めかもしれない。

(……………っ……………)

海翔から罪悪感が生まれた。自分はこんな小さな子まで、寂しい

思いをさせる奴だったのかと。

「海翔さん。どうしたんですか？こんな所で」

少女——初春飾利が祈りを終えると、海翔に気付いて話し掛けてきた。

初春も海翔の入ってた177支部の風紀委員ジャッジメントの一人で、海翔の知り合いだ。

今は177支部には、初春飾利、白井黒子、その先輩、固法美偉の三人で構成されている。

「墓参りだよ」

海翔はさり気なく、初春の横を通り抜け、墓の前に着くと手を合わせて祈る。

祈る時間が経つたび、海翔の心が空白に染められていく。さっきまで戦ってたのが、嘘のように。

「来てくれてありがとうございます」

祈る海翔に、初春は頭を下げ礼を言う。

祈り終わった、海翔は振り向かず初春に言った。

「……気まぐれだよ」

初春は海翔に優しくかった。彼の力が弱かったばかりに、兄を守りなかつたというに。だからこそ、海翔は罪悪感を覚えたのだ。海翔にとって初春の『優しさ』とは『甘さ』に思えた。こんな奴になん

優しくするのか、という発想。海翔が勝手な考えか、ただ単に海翔がひねくれ者か。

「お兄ちゃんの後を見守ってありがとうございます」

「…ああ、」

海翔は初春の方を向き、笑顔で応えた。誰でも分かる作り笑顔だから………

∞

海翔は祈りを終えたあと、第10学区のバス停前に来ていた。

海翔は別にバスに乗るわけではないが、ここではある少女との待ち合わせをしていた。

少女との待ち合わせ、というデート的な展開に海翔は内心、ドキツとしたがそんな展開を望んではない。

海翔は恋愛こそしたくないが、フレンダという少女に会うには、妙に気が引けた。初対面（互いに名前は知っている）なのにも関わらずだ。決して腐れ縁があるわけではない。

待つてること数分。やって来たバスの中から、ソレは来た。

そのバスから降りてきたフレндаという少女は、仕方なさそうに学生バックを持っていると思いきや、海翔の顔を見るなり、手にしていたバックを大リーガーの如く海翔の腹に投げつけた。

「ゴフウ!!」

海翔は空間移動で受け止めようとしたが、間に合わずバックは腹を直撃。

顔よりはまだマシだったが、それでも痛い。妙に気が引けたのではなくさっきのは逃走本能かもしれないと思いながら、なんとか立ち上がる。

「このおー、姉さんの知り合いは変人やローばかりだ」

「私がフレнда・セイヴェルンって訳だけど…君が海翔って訳」

金髪碧眼の少女は呆れながら、海翔に言う。海翔はバックを投げた理由を問う。

「さっき投げた理由は!!」

「どうして私が海翔のバックを持って行く羽目になる訳よ」

「それ！それが理由ですか？しかも僕が海翔ではなく『通行人A』だったらどうするんすか!？」

「大丈夫。特徴は麦野に聞いたから」

フレンドの一方的な八つ当たりで頭を悩ませる海翔。
初対面なのに、さすがにひどいのではないだろうか。そして腹いせに海翔はフレンドに爆弾発言をする。

「貧乳ヤロー、悪女!!」

年頃の少女には爆弾だ。それを聞いた瞬間、導火線が着火。一秒もかからず爆発し、爆風は海翔に向けられる。フレンドはニッコリ笑顔。

「フ、フレンド!?何をそんなに笑ってるの!」

と言っても、笑いの質が全く違っていた。

この二人を客観的に見ると、海翔の選択肢が死ぬか殺されるかのどちらかしかないような気がする。

海翔はフレンドの手を見るといつの間にか、手榴弾が左右に2つ、計4が握られていた。死を悟ったのか、慌てて海翔は止めに入る。

「うわわわフレンド、じゃなくてブルジョワ落ち着きください!!僕はスラム街の子供です!!人畜無害の人間です!」

「ほほう、そしたらブルジョワを侮辱した罪を受けなさいって訳よ!」

「ってうわ、あなた様はそんな方でしたか。だから、貧乳何だよってうわわわ!」

「結局、貧乳は関係ないって訳よ」

さすがに手榴弾をここで使うわけにはいかなかったのか、フレンドは手榴弾をしまい込んだのかと思うと、血管がはちきれんばかりに、バス停のイスを女の子の子と思えない勢いで、振り回す。

「ああ、そうか！お前男何だな。だから、力あるし、何より貧乳何だ！よし納得ってゴフフウ！！！」

フレンドの振り回したイスが、海翔の顔に直撃！！
さすがの海翔もこの痛みは我慢できず、思いっきりぶっ飛ぶ。

最後に「マザー・テレサ help me」なんて言ったが、来るはずがなく、そのまま倒れてしまう。

こんな日常を送る海翔だが、彼はツンツン頭のように不幸な男なのではない。

ただ単に『ツイてない男、デリカシーがない男』なのである。

∞

「はあ、なんとか学校に間に合った」

フレンドに半殺し？にされたあと、それでも踏ん張りながらHRが始まる五分に到着した。初対面にしてはひどい相手である。

「ん？どうしたんや、らいやん。かなり疲れてるけど？」

こういう時の人間はそつとしておくものだ。そんな常識も知らずにクラスの子バカ（デルタフォース）こと青髪ピアスが海翔に話しかける。

海翔は顔を机に付けたまま応える。

「んあー？僕はバカと違って風邪引くんだよ」

ちなみに海翔が知る由もないが、『健康』とは笑うことでも良くなるらしい。

笑うことで脳は活性化され、それは体にまで影響し、健康を維持できるのだ。バカはよく笑うっていうイメージがあるから、『バカは風邪引かない』なんて言ったりするのだろう。

「な！？違うで、バカを馬鹿にするなあ。馬鹿キャラってのは漫画では、意外と人気やったりするんやで。覚悟するんやならいやん。いつか僕はウツハウツハーになるんやで。彼女ができて、結婚。小さな白い家には、夫が一人妻が一人、子どもが一人。毎日

が幸せで、笑顔が堪えない明るい家庭♪」

夢を通り越して妄想の世界を満喫するつもりだろうか。というより、『結婚』を夢に入れた時点で、お前は乙女かと。

どうでもいいと言わんばかりに海翔は、盛大な溜め息を吐く。

そして、溜め息を吐いたあと、異常な緊張が自分のを包んだことに海翔は気付いた。

ここは学校。危険なことがあった場合の避難訓練は、学園都市の学校でも、外の学校でも行うのが普通だ。

(……………一体、何だ!!)

しかし、この危険が近づく緊張感では、避難訓練なんて到底役に立たないように思えた。避難訓練の練習しかなかった兵士が戦争に駆り出されたようなものである。

確かな、殺意――

(どこからだ!?)

彼の感じた殺意は、四方八方から飛びかかってきた。その正体は窓の外に居るかもしれないし、隣のクラスかもしれない。もしかしたら、このクラスに紛れて居るかもしれないし、青髪ピアスかもしれない。

もしかしたら、自分自身かもしれない。

それらを踏まえて、周りを確かめる。いつの間にか、海翔の首筋から汗が流れ出ている。

「どうしたんや？らいやん？そんなに周りを敵みたいな目で見て」

今の海翔には、そんなジョークは聞き取れてなかった。

そして、教室の窓を調べる。——と同時に殺意は消えた。

「何だっ たんだ？」

同時に緊張感が解けたが、同時に蟠り感^{ほど}が体^{わたかま}を覚えた。それすら気付かずに、海翔は朝のHRを迎えることになった。

今日の夜。銃声が鳴り響くなど知らずに……………

およそ、200mの離れた解体途中のビルの屋上にそれらは居た。

一人は30代の男性。白髪に似た短い銀髪をオールバックで、サングラスを掛けており、緑のスーツに赤と黒のしましまのネクタイ。中には黄色のワイシャツを着込んでおり、襟を立てている。

もう一人は20代の女性。足を組んでビルの屋上に出しており、髪型は水色のポニーテール、上は青のティシャツ、下は、革製のベルトで留めたグレーのダメージジーンズを着ている。

「あれが、永来海・翔く、今回のターゲットにしてはつまんなさそう何ですけ・ど」

女は屋上に肩手を付けながら、海翔の通っている学校を見つめながら言った。勿論、200m先の人間を区別するのは、常人には不可能なため、軍用の『偵察用スコープ』を手に取り、眺めている。この『スコープ』は『対能力者』のもので、複雑な造りでできていた。

スコープの横には、小さなレバーやボタンがあり、光を遮断、熱探知機、音波、AIM拡散力場を読み取り、それらを構成することで、一キロ先の能力者が誰なのか分かる優れ物だ。

「俺らが始末すべきはアイテムだ。上層部ではアイツは餌の役目を果たすだけに過ぎんと言っていただろう」

男はサングラスの中から、女に目をやる。

「アイテムのリーダー・麦野沈利の義弟何で・しょ。アイテムのリーダーが動けば、全員を手のひらで躍らせられるっていう魂胆だ・ね。やるじゃん上層部。そういう仕事って楽しいの・よ。」

「ふむ、しかし勿体ないな。『永遠の能力計画』の能力複写を殺すことになるとは……………」

「あん？あいつは、level3で・しょ。だつたら落ち・こ・ぼ・れ・じゃ〜ん。」

女は、スコープを置いて笑い出す。

その横には、かなり硬度に見える全身専用のアーマと、横長い黒のトランスバックが置かれてある。

女はこれを見て、上品に手を口に当てながら言った。

「うふふ、これを使う出番がきたか・も。」

すると、男は珍しそうに「使うとは珍しいな」とアーマに目を向けながら言った。

この男の様子を見る限り、この女はアーマをいざというときにしか使わないのだろう。言わば、切り札。

「永遠の能力計画の奴だから・ね。一応油断できないか・も。てか、勿論あんたも使うつもりなんで・しょ。」

男は「当たり前だ」と言っ、横長の黒のトランスバックを手に取る。これもおそらく切り札なのであろう。

そして、決められた。

―この二人にとって海翔は『永遠の能力計画』の落ちこぼれといえども油断ならない相手だと―

海翔は切り札を使わなければならないほどの敵か。

―それは今日の夜、明かされる―

暗部の四人（前書き）

今回はアイテムがメインです。

暗部の四人

海翔が学校に行ってるなか、とある学区のファミリレストランで、少女達の会話が聞こえた。

ファミリレストラン、略してファミレス。その店は家族連れに対応した業態の飲食店と答えるが果たしてそれが本当に正解と言えるのだろうか。

学園都市。230万人のうち、八割が学生の都市だ。故に、家族のもとを離れ学生寮に暮らして居る学生が多い。そのため、家族連れの客は少なく、学生の友達同士で来る客が多い。

今後は『フレンドレストラン』と呼ばれるかもしれない店の中で、聞こえる会話は、4人の少女達のものだった。

「結局、海翔ってば私を見るなり悪女呼ばわりって訳よ」

右側の窓の方に座ってるのは、金髪碧眼の少女——フレнда・セイヴェルン。レストラン内にも関わらず、缶詰めの『カレーサバ13（サーティン）』を開け、フォークで刺しながら食べている。ちなみにこの缶詰めは合計80種類の味があるらしい。そんなに味の種類があるんだったら、面白半分で作ったまともな味じゃない物もあると思う。ていうかある

隣に居る絹旗最愛はそれが気になったが、フレндаの言った、麦野の義弟について応える。

「フレндаが超他人の男の事言うなんて、超珍しいです」

絹旗とフрендаの向かい側に居る少女——脱力系の滝壺理后と『新発売、名も無き鮭弁』という鮭弁のクセして、やたらカッコいい名前のした鮭弁を食べながら、麦野も応じる。

「あんた達は処女だからね。どう言われても仕方ないことよ」

「あ、麦野。超ひどいです。だったら、麦野は超誰かと付き合ったことはあるんですか？」

処女の絹旗は両手をテーブルに叩く。しかし麦野は「無いわよ」と応えて否定する。

「大丈夫。そんな処女の麦野を私は応援してる」

その三人の会話の中で、ここぞと言わんばかりにフрендаは言った。

「ふふーん、私はあるって訳よ」

「（超）マジで」

麦野と絹旗の突然の驚きに、思わずフрендаは動揺する。

「そ、そんなに驚くと失礼って訳よ。いい、あれは、ある日のことでした」と、一呼吸しながら、学校の先生が授業を説明するように続ける「私は、あの時ある男の人とぶつかりました」

「超唐突ですね」

「今作った話じゃないの？」

「大丈夫。そんな自分の妄想に引き込まれがちなフレンドを応援してる」

フレンドは三人の毒舌な言葉に首を横に振りながら、気にせず続ける。

「そして、そのぶつかった男に『おい、何ぶつかってんだよ！！ああ』って言った訳よ」

「（超）謝れよ！！」

お前は不良かと、勢い良く突っ込む二人に滝壺が目だけで、二人に「こういう子は夢見がちだから、せめて夢だけでも見せてあげよう。一生処女のままでいらせるのは可哀想だから」と本人からしてみれば、優しさで言ってるかもしれないが、他人からしてみれば馬鹿にしているという目で訴える。

妄想少女？フレンドちゃんは、それに気付かず、話を続ける。これを見てる三人はフレンドのイメージが大幅に低下してることだろう。

「すると、その男は」と席から立ち、片手をグーにし、目を瞑りながら歌うようにわざと野太い声と勢いで『…すまない、…君の美しい美脚を傷つけて、しまつて』…」

今更言つのは何だが、さっきまで彼女達がレストランで弁当を食べてるのに注意しようとしていた店員さんや、窓の外でレストランを通り過ぎようとした人々は足を止め、フレンドを見ながら、笑っている。

窓側からは、『変なお姉ちゃん』とか、『見ちゃだめよ』とか、『可哀想。薬の使い過ぎでああなったのね』とか聞こえたきたが、妄想少女のフレンドは知る由もない。そのことを知ってる三人は、フレンドを止めようとしたが、やめておく。うん、夢はできるだけ見せてあげよう。というか、他人の振りをした方が良いのだろうか。っと、やっとフレンドは自分の状況にやっと気付く。勿論、さっき言ってたことはただの妄想だ。

妄想少女フレンドは、目を見開き顔を真っ赤にする。
すると、麦野は話しがずれてると分かれるとフレンドを正気に戻すため、両手を軽く叩く。

「はいはい、そこまで。フレンドちゃん、本題に移るわよ」

「は、はい、麦野隊長!!」

「超汗ってますね」

「大丈夫。そんなあまりにも可哀想なフレンドちゃんを私は応援してる」

「ううゝ、いつの間にかお笑い担当になってる訳よ」

「超子供扱いでもありますけどね」

そして、話しはまたあらぬ方向へとズレる。その原因はまたもフレンド。

「子供扱いってどういう訳よ」

「『貧乳……』」

珍しく、息を合わせる三人。フレンドへの突っ込みなると息が合うだけなのか、それともフレンドが誰でも分かる貧乳なのか。まあ確かに、フレンドは自分のスタイルが年下の絹旗より低いことを気にしてることは事実だが……

「ねえ、麦野!!」

フレンドは自覚しながらも、自分が貧乳なのかを麦野に顔を近づけ問う。

それに、びっくりしたのか、クールビューティ（海翔段）な麦野が珍しく動揺する。

「な、何?…」

「胸触らせて!!」

「はあ!」

もはや、滝壺はどうでもいいというか、他人の振りをするため、ため息をしながら、窓を眺めている。

「触ら、せなさあーい!!巨乳というものがどういふものか知るのが、今の私の使命って訳よ!!」

「ってこら!、プライドをズタズタにしながら、テーブルから、私の胸を触ろうとするのは止めなさい!!絹旗滝壺助けて!!」

「ぼーっ……………」

「滝壺さん！？他人の振りしながら窓を眺めないで、フレンドの超変態行為を止めてください！！」ってフレンドそんなに超リアルに驚掴みしたらってうわ麦野そんなに超巨乳だったんですかぁ！？」

「絹旗納得しないで止めなさい！！」

「胸ーて訳よ！」

「…ぼーっ……………」

と、あんなことこんなことしてるうちに、麦野は妄想少女改め変態少女の襟首を掴む。

「フレンドだぁー！ちょっとこっちに来・なー・さぁー・いっ」

麦野は笑顔でフレンドの襟首を掴んだ状態で、ボロ雑巾のように床に引きずりながら、トイレの方へ引っ張る。

絹旗と滝壺の残された二人に「助けなくていいから、せめてヘヴンリートウギャザー」とフレンドの叫び声が聞こえたが、気にしないのが一番だ。うん、今頃変態少女は、手錠ブレスレットと牢獄無料宿泊券をプレゼントされていることだろう。

と、急に絹旗の雰囲気が変わった。

「と、冗談はここまでにして、滝壺さん。今回の仕事について今から超説明します」

さつきまで、他人の振りをした滝壺は絹旗の方へ顔を向ける。

「うん」

「今日の仕事は、ある研究所の破壊、及び、その責任者全員を
超抹消することです」

さつきまでの少女らしい会話に、物騒な単語が流れ込む。

「そして、実行時刻は夜に行います」

今日の夜、アイテムは動き出す。

麦野の義弟、海翔が狙われてるのも知らずに……………

暗部の四人（後書き）

麦野のキャラが変わってる（汗）でも、面白いのでこれもありかと（汗）

感想お待ちしております。

二つの科学兵器（前書き）

所詮、高校生一年の駄作ですので、あまり期待しないでください。

二つの科学兵器

「どちらにしようかな」

天の神様の言うとおりと、言いながら海翔は、商品棚から二つのゲームソフトを取り出す。

ここは、とある学区のとあるゲーム売り場。

学校が始業式だったので、夕方前に終わり、暇つぶしとして、海翔は友達——上条当麻を引き連れてここに来ていた。

「永来さん、二十分経過しましたけどまだ悩んでおられるんですか？できれば早くしてほしいんですけど」

上条の気の抜けた声が、海翔の耳に聞こえてきた。
しかし、上条が言うことは、海翔にとって単純な話ではなかった。

海翔が手に持っている二つのゲームソフトは、雑誌の表紙に載っており、それなりに期待された大作ソフトだ。

一つはギャルゲー、もう一つはRPG。前者は妄想、後者は夢。
最近の高校生は暇な時間をゲームで潰すので、悩むのは当たり前である。

海翔は『能力複写』でlevel3。それなりに奨学金はあるので、二本とも買うことは可能だが、それでは生活費が危ういので悩む一方。

（まあ、悩める金があつて良いよな）

上条は頭をポリポリと掻きながら、海翔を羨ましく思う。

上条は、何の変哲もないlevel0。無能力者である。そのため、奨学金は厳しく、バーゲンでは戦争してるとかしてないとか。

そんな根っから生活費ピンチの上条を、知る由もなく、いまだにブツブツと何か言っている。

「いや、僕には姉さんがいる。姉さんを裏切るわけにはいかない。よし、このRPGソフトに決定――！」

シスコン全開海翔君、颯爽と蝶のように舞い、レジに向かう。

なにやら、勝手に海翔は盛り上がっている。そんなにゲームで暇を潰す時間があるのか。暇なことさえない毎日ドタバタの上条は、一人呟く。

「はあ、あんな気楽な奴がなんで風紀委員を辞めたんだろうな」
ジャッジメント

「超おかしいですね」

アイテムが使う一室で、ソファーに腰掛けながら、絹旗は一枚の書類を見ながら、眉をひそめた。どうやら、出撃する研究所の情報の書かれた書類らしい。

その中の『内部の最新研究兵器』に注目しているようだ。

「どうしたの？ 絹旗」

ソファーの後ろ側から、フレンドが顔をひょっこり出して、絹旗に話し掛けてきた。

「これですよ。『大破製1次元遮断アーマー』と『大型電子操作機』」

「それがどうしたってわけよ」

それを聞いただけで、麦野は何か悟ったように言った。

「名前だけでも嫌な予感がするわね」

その研究所の兵器には、科学に関する単語が入っていた。

ここは科学が発展した科学の都市だ。超能力さは元より外より危険な科学兵器だつてある。超能力はちゃんとそれに合った名前が付けられているんだから、科学兵器にも、ちゃんとした名前の意味があるだろう。

「結局、危険な兵器があるのはどこの研究所も一緒ってわけよ」

「超違いますよフレンド。私達が言ってることは超別のことです」

滝壺も理解できなくなってしまったのか、フレンダと一緒に首を傾げる。

絹旗は、溜め息をつきながら、「超移動されてるんですよ。その二つの兵器が」

絹旗の言ってることに、二人は疑問より、疑いがわいて出てきた。なぜ兵器を移動させる必要があるのか。

そもそもその研究所は暗部に狙われているのだ。暗部対策をとるためには、研究所の兵器をフル活用するのが得策だろう。兵器の価値とは、使ってこそ意味があるというのに。

むしろ喜んでその兵器を、彼女達アイテムを実験に使うかも知れなかった。科学者にとって『実験』というプレゼント以外に嬉しいものは、ないはずなのにわざわざ捨てた。

あまりにもそこが不自然だった。

「……………」

全員がその不自然さに気がつく、一気に重い空気が流れ込む。どこを解釈したら、研究所側にメリットがあるのか考える。

『…プルルル、プルルル』

解釈の代わりにはなかったものの、重い空気を断ち切るように麦野の携帯が鳴りだした。

麦野は、携帯を手に取り開くと、端末から電話番号を確かめたあと、それを見るなり、携帯を耳に付けて、電話に出る。

その電話から…答えは出た。

「なんですって……………」

普通悩んでいた答えが分かったら、すっきりするものだが、麦野にとってはまったくその部類に当てはまらなかった。

分かったというより……………分かってしまった。

もつと簡単に言ったら、知ってしまった恐怖。

軍事機密を知ってしまったて、指名手配にされるような……………いや、違った。

麦野はその恐怖を知ってしまったからこそ、動かねばならなかった。その恐怖は、麦野の起動スイッチみたいな物だろう。

「フレンド、絹旗ついて来て。滝壺はここで待機」

「ちょっ、どうしたってわけよ麦野!!」

出撃は夜だったはず。それを知ってるフレンドは麦野を止めに入るがどうも様子がおかしい。まるで、殺意に満ちていて――

「海翔を狙うなんてブ・チ・コ・ロ・シ・確定ね」

∞

海翔はアイテムが一騒動してることに、気がつく分けなく、今度は上条の誘いで、夜ご飯を食べるため、レストランに来ていた。

外は夜になっており、太陽が沈んでいたため、夏の蒸し暑さが少しマシになっていた。

レストランで、冷房に当たる人達には関係ないが……

「えーと、生クリームプリンとショコラケーキ、白玉ぜんざいを一つと三種類のムースを3つずつお願いします」

「分かりました」ごゆっくりどうぞ

無論、二人が食べにきたのは夜ご飯だ。上条は海翔のオーダーが気にならないわけがない。

「海翔さん？束の間のことお聞きしますが、目的をお忘れではないでしょうか」

「満腹」

「いやいや確かにそうですけども、注文が偏りすぎておりませんか！？」

「白玉……実は米」

「それでもいや確かにそうだけどちげえよ！？白玉をぜんざいにしたら、おやつだろ！？」

「どっちだよ！！ってか、白玉なめんなああああ。昔はある武将さんが、白玉大好きで、米の代わりに、白玉にふりかけかけて食ってたんだぞ！」

「なぜわざわざ白玉なんでせうか！？ていうか武将の頭の中を見たいわ！」

「な、だったらこれは凄いで。白玉を使って雉、猿、犬をお供にして鬼退治したって話！」

「確かに童話ですよ。高校生のクセに、童話で夢見るお前の頭の中を見たいわ!？」

「そんな時は、僕の姉さんにお前を殺してもらおう!」

「って結局俺がつて、……永来、少し待ってくれ」

「?」

上条は永来にそう伝えたと、席から立ち上がり、奥に行く。

(何々ナンパって駄目だ。僕には姉さんが)

と、海翔の妄想通りに行くはずはなく、上条は女の子を連れてこれなかった代わりに、どでかい声が聞こえてきた。

「あああん! テメエエヤんのかあ」

どうやら、上条は明日から夏休みだというのに、初日前から、アバウトかつアグレッシブな夏休みを送ると宣言したらしい。

そう思いながら、上条の方を見ている。

今更だが、海翔を含めクラスのみんなは彼のことをこう言う。不幸、または不幸の避雷針。

それは事実で今も、上条が不良達に囲まれているのが見受けられ

る。同情するしかないだろう。でもここは――

「上条君お元気でー♪」

あえて無視。だつて関わるの面倒なもの。

結果はもちろん、上条が不良達に追いかけられる光景。

「不幸だあああー!!」

ちなみに、海翔からすると今の上条の顔は『卑弥呼様ー！邪馬台国の一大事でございますぞー!!』と言つてるように見えるらしく、その上条はそれぐらいの迫力で形相を変えながら、明日の生存に向かつて全力疾走している。そして、そのままレストランの入り口に出ると、不良達もそれを追いかけて消え去った。

一人残された海翔は、水の入ったコップを軽く口に含むと、ずっと後ろからみていた髪が茶色い肩まで肩掛かった女の子に話し掛ける。

「あいつら、追いかけていいの？いつものお前なら、雷撃放つんじゃないの？」

女の子――御坂美琴は、応える。

「別にあんたには関係ないんじゃない？」

「確かに僕には、関係のないことだな」

御坂美琴はちよくちよく117支部に遊びに来てたので、海翔とは面識があり、知り合いだ。それにしても――

…」

「それにしても、何で僕の周りには変人がたくさん居るのかねえ
」

「あんたはその部類に入らないの？」

間髪入れずに、御坂が言う。

「どーかねえ…、ほら、あいつら行ってしまっぞ」

急かしたように、応えたと御坂もあの少年を追いかけることを思い出す。

御坂は何も応えずに、レジに向かうと、お金を払い、レストランから出て行った。結局は海翔一人になってしまい、寂しいのか分からないが、愚痴をこぼす。

「つたく、なんでドイツもこいつもイタリアもみんな落ち着きがないんだろうな」

∞

「はあ、食った食ったあ」

腹を軽くさすりながら、海翔は一人で家に帰り道を歩いていた。空は真っ暗だったため、人口の光が、帰り道を照らしていた。

夏のため、虫が多く光に集まっている。

海翔は別にこの空が嫌いではなかった。太陽が落ちて、星と月が空を支配する時間。これを見るたび、海翔は落ち着きを取り戻す。だから、気がつかなかった。

“カチャリ”とその音は、距離にしておよそ10m。ここまで、近いというのに、相変わらず海翔の表情は緩んだままだ。

そして、徐々に海翔に標準を合わせる。

すうー、と夜の闇に溶けるように息を潜ませ、虎のように牙を構える。

「死ね」

ドン”と、爆音に似た銃声に気づいた頃には、もう遅い。

「――！」

銃声からした方向からは、直径50cmの青白いレーザーが海翔に向かってアスファルトの道路を砕きながら放たれた。

それを見た海翔は、避けることも、口にすることもできなかったが、あることに気づく。

一つ、向こう巨大な銃があったこと。二つ、向こうにサングラスを掛けた中年の男が居たこと。三つ、――

（これ、姉さんの技、――原子崩し（メルトダウン））

「はぐっ――！？」

レーザーは海翔にぶち当たり、体が千切れ飛ぶことすらなかったが、アスファルトの破片ごと、海翔は地下階段の方へノーバウンドで吹き飛び、およそ10mで体が地についた。

「くそ、一体なにが！」

もちろん、海翔はこんなこと予測はしていなかった。そんな、狙われるようなこともしていないし、後は家に帰って、疲れをとるため寝るだけだった。そんな奴が、敵が近くに居ることも気付けるはずがない。

（何で、姉さんの技を）

それも謎だった。

考えながらも、痛みに耐え、アスファルトの破片を踏みながらなんとか両足だけで立ち上がる。

（……電車）

海翔は周りを見ると、ここが地下鉄であることに気付き、逃げ場がないか探す。

「はい、死んでもらうわ・よ」

女の声が耳を突いてきた。同時に階段の方から、二人分の足音が聞こえてきた。

そして、二人は海翔の視界に現れた。二人を敵と確信し、海翔は能力の演算体制に入る。

「誰なんだよ…お前たち」

二つの科学兵器（後書き）

次回バトル勃発です。

アドバイスくださると嬉しいです。お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863y/>

とある科学の能力複写《アビリティコピー》

2011年11月29日12時45分発行